

よくぞ大学へ行ったものだ

つい先日、十三第七藝術劇場で「祖谷物語」を見てきた。私の友達も十三で居酒屋を経営していたが、今年3月7日の火災で類焼し、今は少し離れた場所で再出発している。名前は「大歩危」と言い、まさしく秘境の名である。

ところで「祖谷物語」の監督は、蔦哲一郎と言いまして、この人は池田高校の元野球部監督の孫である。

私も池田高校の校友会近畿支部の事務局長を現在受けており、何かことあるごとに田舎の情報が入ってきます。

今回、校友の声を書くに当たり、何を書くか迷っていました。

常常口では、生い立ちの事をしゃべっていたが、文章にしたことは一度もなかった。

この映画を見て、生まれ育った田舎、そこでの学生時代、また大学へ行くまでの過程を、思いだし書いてみることにした。

生まれは徳島の山の中、海拔八百メートルの高地、田は全国棚田百選にも載っている小さな水田、畑は段々畑、谷（川ではない）に行くまで三十分かかる。

家族の主な仕事は、たばこ、米、麦、芋他野菜を作って自給自足の生活。唯一の収入源は、たばこの納付によるお金であった。

小学校は四年生まで近くの分校、同級生九名を含めて総勢三十名の小さな学校でした。一、二年が同じクラス、三、四年が同じクラス。先生はクラスに一名。

四年が終わると本校へ、クラスも増え四学級になった。

第一次ベビーブームの世代で同級生は一気に百五十名となった。

四年間、共に歩んだ仲間と分校から来た生徒では、よく摩擦が起こり先生を悩ましたものである。

小学校時代の思い出は、校長先生がなくなり「あかとんぼ」の替え歌を葬儀の時に歌ったのと、高知に行った修学旅行かな。

修学旅行は、龍河洞・桂浜・高知城などを見学したがその集合写真に私だけ帽子をかぶっていません。

汽車（当時は石炭車）の中でうれしさのあまり、はしゃいで窓から帽子を落としてしまった。思い出はこのことである。

さて、中学校はそのまま全員隣の校舎へ横滑り、私学などの学校があるなんて考えてもみなかった。

クラスは三学級となり、一クラス五十名なので狭い中での勉学でした。

中学校では、野球部（三年の時グラウンド狭く廃部）、バスケットボール部で練習し帰りはいつも遅かった。

早く家へ帰るとたばこの手伝いが待っており、練習を口実に逃げていたかも知

れない。

農繁期には近所の人達も手伝ってくれているので、兄弟姉妹（男三人、女三人の六人）から兄貴はいつも遅いと文句を何度も聞いたものである。

中学校時代の思い出は、バスケットボールの郡内予選で準優勝したのと、近畿に来た修学旅行である。

修学旅行中「一晩知人の家に外泊してよろしい」と許可が出たので、母親に頼んで、むりやり親戚の家に一泊した。

さて、中学三年にもなると、クラスを分けて進学・就職について考えなくてはならない。兄弟が多く、とても進学など考えられないので、担任に相談したところ、「進学しなさい」と言われた。「お父さんがそう言っていますよ」とのことであった。

当時は、進学する生徒は全体の二割程度であり、集団就職にて関西地方に出てきた時代であった。

高校進学を決めたのも、担任の先生です。父と担任の先生は、ことある毎に食堂（当時は飲み屋はなし）で一杯やって息子の進路を決めていたようである。このことは卒業してはじめて担任の先生から聞かされた。父から聞いたことはない。

進学校は近くの高校（バス通学可能）ではなく、池田高校に決めた。

いざ合格しクラブなどをすると通えなくなるので、一年の時から下宿住まいをした。またしても農作業から逃れたので、兄弟からブーイングがあったことは間違いない。

高校時代の思い出は、三年間無遅刻・無欠席で授業を受けたことと、またしても修学旅行です。

旅行先を大半の生徒は、東京を希望したが、私は三十人と共に山陰旅行を選んだ。

いずれ、東京は生活する場所であると考え、縁結びの神様、出雲を選んだ。

いよいよ、大学進学のときがきました。あまり勉強は得意ではないので、父親と進路について相談すると、「中央大学の法学部に行け」と言われた。これは当時の町長が出身校であったためである。

親の思いとは裏腹に国立の教育学部（学校の教師になるため）と私学は関西および関東の六大学の工学部を一つずつ受験した。

もしすべて不合格ならば、親の手伝い（その当時は林業会社社長）をやると決めていた。兄弟すべて学校に通っていたので、相当出費が重なり、少しでも生活の支えがしたいと考えるようになり、半ば進学は諦めていた。

首尾よく明治大学に合格した。父の喜びようは今でも覚えている。

父は、自分が戦争で、兄弟がなくなり（父は二男）跡を継がなきゃいけないの

で、自ら進学をあきらめたので、子供達には、学校（最低でも高校）だけは行かせたいという願いがあったようである。

私学、東京での生活となると二重に出費が重なり、父母は一時期大変な苦勞をしたと思います。

いま思ってみるとよく東京の私学に行かせてくれたなあと父母に感謝してやみません。

また、よく言われます。「兄貴は高校・大学と全国に名の通った学校に行けて幸せだったなあ」と。

運よく大学を卒業させて頂き、また校友会の皆さんと親しくなれて、いつも幸せを感じています。明治大学を出てよかったなあ。

46年工学部建築学科卒

華本数則